

比庵佳境の会

見わたせば 四方のさくらも 咲きいでて あはれ今年も 春の人なり 比庵九十二

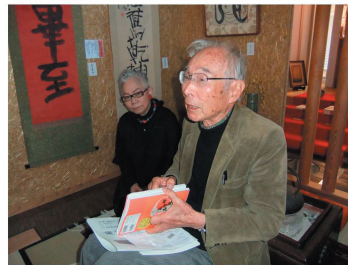


桜

昭和49年

清水比庵の歌友秋田 秋良

秋田 征矢雄（秋田 秋良の子息）



墨の美術館で講話される
秋田 征矢雄氏
(平成28年1月)

岡山県西南の地瀬戸内海に面した柴木という、山里の丘に秋田家の墓地があり、その中に秋田秋良の墓（側面に

「わが歌をひたすらほめてほめてさて」
「まどかなる夢を結ぶといふこと」

いかにまどけきものにあるかも」

がある。この二人がいつ頃出会って親交を深めていったかは定かでないが、比庵先生の妹（章子）さんが笠岡に嫁いで来られ、書歌をよくされていたことからの縁ではなからうか。父が昭和四十六年七十歳で急逝し、遺品の中に宝物のように保存されていた比庵先生の書簡三百十九通の最初が昭和十四年のことからすると、日光町長を辞めて千葉県市川市の自宅に帰って歌書画の三芸に本格的に取組まれる時期である。日本はこれから太平洋戦争へと突入、ほどなく都会から田舎への疎開が起こる。比庵先生も戦中戦後笠岡に疎開さ



左 秋田秋良の墓碑 右 清水比庵夫妻の墓碑

れ、父と逢う機会が多くなり、時には桃や梨の花見・野点、笠岡沖での釣りなどを楽しむこともあり、その時の画や歌が多く残っている。学歴差、年齢差（十九歳）が大きい二人が、後半生の長きにわたって親しい心の友として交流を続けたことを

清水比庵と秋田秋良
笠岡沖にて（昭和四十二年頃）



比庵先生は父への追悼文で次のように言っておられる。「じぶんには友人は多くいるけれども、相対してまたは手紙の上で秋田君くらい楽しく語ったことはない」（窓日 昭和四十六年六月号）げに言葉の対話に文通に深く豊かな心の交流を美しくもあはれ

に思う。

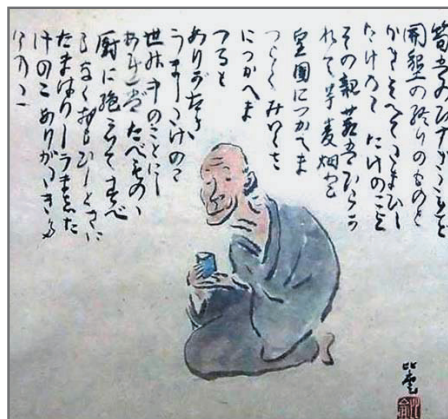
また父の書いた「野水帖」十首抄感想控（註）について比庵先生が追悼文の中に天下の名文であると絶賛しておられるので、父の選んだ十首を記載する。

- ・花散りて或は寒き日のありぬ
- ・春の行方のしづかなりける
- ・雨ふればとなりの屋根のぬれてあり



比庵が秋良に送った作品
 書をかきて歌を詠みてもたのしめと
 君のあるこそなほたのしけれ 八十一比庵
 (昭和38年)

となりの屋根もわが眺めなり
 ・雨降りてぬれたる道をしばらくは
 誰も通らぬ夕光があり
 ・身のまはり独りみずからすることは
 死にたる妻をおもふことなり
 ・われによく尽してくれてわれをよく
 尚もながらへしめて妹は
 ・まだかなる夢を結ぶといふことの
 いかにもどけきものにあるかも
 ・山村の雪の消えぬ間のまんさくの
 花のたよりに未だ嫁がず
 ・その姉のことをききしに死にしろと
 ただ年老いて死にたりといふ
 ・天翔る窓の下より富士の山
 麓まで見えひとりそびゆる
 ・アポロ人いま月の上にその月が
 半弦にして天にかがやく
 (註)「野水帖(やすいちょう)」十首感想控
 とは比庵の弟三溪が比庵の米寿を祝って発
 行した美術本「野水帖」に記載されている歌
 一七〇首から十種を選択しその各々に感想
 文をつけたものである。
 (窓日 昭和四十六年二月号)



筍(秋田 秋良へのお礼の長歌)
 筍はのびすぎたれど開墾の終りのものとかきそへて
 たまひしたけのこたけのこよ その親数はひらかれて
 羊麦畑と皇国につかへまつらくみいくさにつかへまつると
 ありがたきうましたけのこ世の中のことにしあれば
 たべものへ厨に絶えてすべもなくおもひしときに
 たまはりしうましたけのこ ありがたきたけのこ 比庵
 比庵が笠岡に疎開していた昭和二〇年春の作 六十三歳

追記

清水 固(会長 比庵の孫)

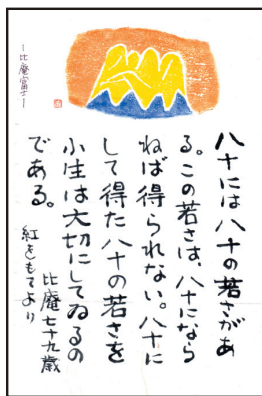
祖父清水比庵は家族(妻・娘・弟妹)はもちろん多くの友人知人に支えられて芸を完成したが、その中でも歌友秋田秋良氏と交わした言葉(会話・文通)は特に心通ずるものであった。比庵は秋良氏の追悼文にの最後に次の歌を載せている。
 散り残るさくらに沈む日の赤し
 秋田秋良のあまり悲しく

秋良氏の二子息征矢雄氏は本年一月に横浜の墨の美術館で開催した清水比庵展で二人の交流について講話された。
 また父君が遺された比庵からの手紙(葉書)三一九通を吉備路文学館に寄贈し、その約半数が吉備路文学館から「比庵歌だより」として平成二十六年に発刊されている。

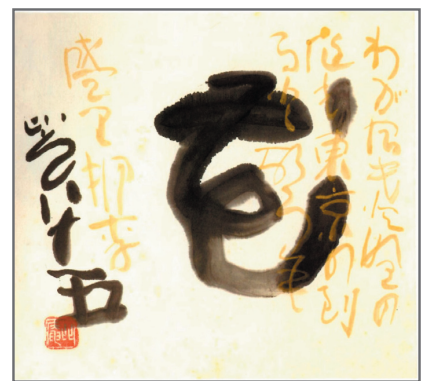
学ぶ楽しみ

片岡 絢子(会員)

私は今絵手紙に夢中です。思いを込めて書かれた葉書をポストに見つけたときには、言葉にならない程の喜びを感じます。絵手紙の魅力は相手に飾らない自分を素直に表現することです。技術よりも感動する心を伝えるこ



この富士はイモ版画です



花 比庵 八十五

とを大切にしています。そのために展覧会に足を運び、良い作品を見ることそして先人たちの書画から学ぶことを心掛けています。そんな中、昨年埼玉県川島町の遠山記念館で清水比庵作品に出合うことができました。大胆な表現、その中にやさしい気持があふれています。真紅な空に雪の富士山が太い金色の線です、これ以上省くことができない形です。墨の一字「花」その上に

わが宿もとなりの庭も東京の
 到るところも花盛りなり
 と散らばっています。画面の絶妙なバランスの美しさに圧倒されました。
 比庵作品のような自由で伸び伸びとした表現を目標に、この貴重な体験を仲間へ伝え、絵手紙を続けて行きたいと思っています。



筆者 絵手紙展で

比庵と笠岡

豊池 勇 (会員)

私は岡山県笠岡市で代々に亘り美術商を営む者です。笠岡は岡山県の西の端に位置する人口五万人ほどの小さな処です。北は三方を山に囲まれ南は瀬戸内海に繋がっています。風光明媚な土地柄で山の幸・海の幸に恵まれた温暖な風土です。

清水比庵先生は、妹の嫁ぎ先であるこの笠岡をこよなく愛して生前にこの地に瞑りたいと希望し、自ら墓所を設けています。(笠岡市内・威徳寺) 墓碑には清水家の墓と自書しています。

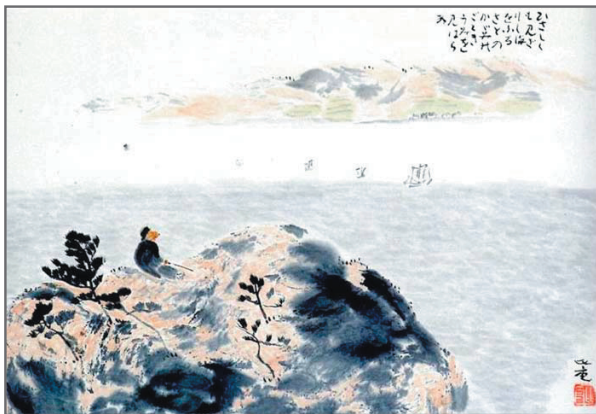
近年に発刊された「比庵歌だより」(公益財団法人吉備路文学館刊)には、比庵が現在のメール感覚で絵と歌を添えて頻りに友人に送った葉書が収められています。その中の一文に、「私のふるさととは笠岡です。」と断じています。関東大震災、太平洋戦争の難を逃れて疎開した時に縁を結んだ土地の笠岡を心のふるさと、ユートピアのように想っていたと感じます。

このような土地ですから、笠岡から文化勲章授賞の日本画家・小野竹喬も育っています。小野竹喬は人を暖かく包み込んでくれるような笠岡を多くの絵の題材にしています。比庵先生と竹喬画伯は生前に互いに畏敬の念を持ち交流を重ねています。

私の父・豊池浪二と比庵先生は、二人の共通の知人であり比庵先生の熱烈な支持者であった故・瀬戸健次郎氏(笠岡地域で多くの映画館を経営した実業家)のご紹介でした。比庵先生が笠岡を訪れる時には私も父と一緒に比庵先生に接しました。比庵先生は九十三歳まで作品を残しています。私はこれは撰生と努力の賜物だと想います。

次女を幼くして亡くし、妻に先立たれた悲しみを乗り越えて、芸術生活続けるには健康が大切と確信が在ったと想います。笠岡の比庵ファンはその辺りをよく心得ていて接待や宴会に比庵先生を煩わせるような事なくお迎えしていました。

或る時、瀬戸さん宅で比庵先生は作品の制作をされました。私はその折に墨を摺らせて頂きました。私が墨を摺っている間に自分の歌集を丁寧に読み直していらつしやいました。出来上がった作品は当意即妙に揮毫し

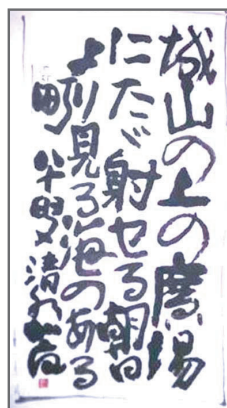


笠岡市寄贈作品 清水比庵「ふるさと」
ひさしくも見ざりし海をふるさとの
かどみのごとき海を見はらす 比庵



城山の歌碑と筆者

歌碑の草稿



追記

清水画 (会長 比庵の孫)

たように受け取る側に見せておいて、本当は種も仕掛けもあるんだなあと想いました。人には苦勞なんて見せなくてよい、ほのぼのと美しいものだけ味わって頂ければよいと云った比庵芸術のダンディズムを感じました。

父との交流で心に残る事は、二人でテレビの相撲中継を観ていた時の事です。勝った負けたと興奮するのではなく、相撲そのものを観ていたようです。殆んど二人共だまってブラウン管を眺めて、どちらからともなく時折あの勝ち方は品がないとか、つぶやいていました。(比庵は横綱佐田の山のファンであった。)

父が他界して現在は私が豊池美術店を継いでいます。二年ほど前に所属しております大阪美術倶楽部に二百点を越す比庵作品が売りに出ました。資金の限界がありますので全部は持ち帰ることが叶いませんでしたが、その作品群を店で「清水比庵展」を開催しました。その折に前出の吉備路文学館さんには赤富士を含む多くの作品の御買上を頂きました。

た。笠岡・古城山公園に建てられた歌碑の草案も入っていましたのでこれは笠岡市に寄贈させていただきました。(現在は笠岡市立竹喬美術館で保管されています)

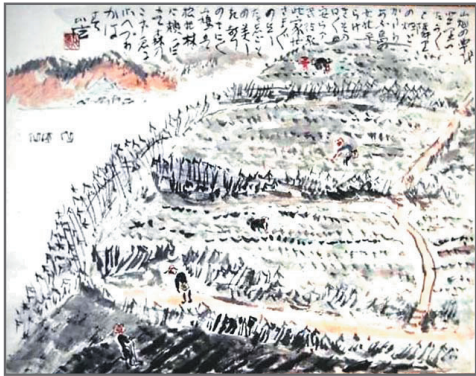
今後笠岡に地で清水比庵先生の作品を久しくご紹介して行きたいと想っています。

インターネットにサイトを開設しており常時に清水比庵の作品を載せていますのでご覧いただければ幸いと存じます。

(豊池美術店サイト
<http://www.toyoike.co.jp>)

笠岡を自らの芸術のふるさととして愛した比庵が笠岡の中で特に好んだのは、古城山公園(通称城山)と妹の別宅があった神の島(こうのしま)であった。笠岡に疎開していた戦中戦後の三年間はもちろんその後毎年夏を中心に三か月ほど笠岡に在住して笠岡やその周辺の人たちと会い、芸術活動をしていった。

古城山には毎朝散歩に訪れていたが、途中で出会うご婦人のこと、山の上にあった一本松(老松)のこと、自分の歌碑建立のことなど、短歌誌窓日(下野短歌)に寄稿している随筆「駒込だより(笠岡在中は笠岡だより)」



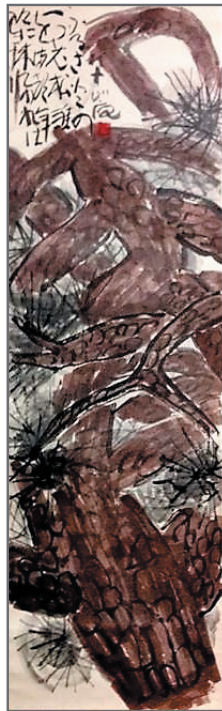
山畑の画

比庵

の中に色々書いている。歌碑は建立から五十年近く経って背後の樹木に覆われてきたがこれを豊池氏が伐採してきれいな姿に復元してくれた。一本松はその後伐採されたが比庵が晩年（八十歳以降）描いている老松の画の画賛に次の歌を多く載せている。

山の上の（ふるさとの）ひとつ老松誰を待つ年々に来てわれは見にけり
妹章子の別宅があつた神の島は当時は笠岡とは海を隔てた小島であり、比庵は笠岡訪問中の多くをこの別宅で過ごした。神島についてもいくつかの作品を描いているがその中の一つに島の女性たちが働くさまを詠んだ長歌を画賛した山畑の画がある。

山畑の草をとりつゝたかだかと隣りの畑とかたりあふ



ふるさとの一つ老松
誰をまつ 年々に来て
われは見にけり
八十比庵

て頂きました。
その日は天候不順にもかかわらず実に多くの方の来場で嬉しい限りでした。歌・書・画そして生き方そのものが深い感動を与える、本当に素晴らしい展覧会だと思います。



今泉 真知子（会員）

昨年九月中旬横浜
浜市栄区の区民文化センター（リリス）で清水比庵展があり、私は受付のお手伝いをさせて頂きました。

清水比庵展を観て

島の中の平らけき
その日その日の安らけき
彼家此家のさまざまの
よしなしごとの美しき
聲のまにまに山鳩は
松の林に類白は
森のこずゑにさへずりかはす 比庵

比庵の時代から半世紀経ったが、市立竹喬美術館では定期的に比庵展を開催しており、館長の上園四郎氏の比庵芸術の著作も二冊出版されている。また市長室には比庵の大書「毎日佳境」の横額が掛けられており、最近比庵が古城山から海を眺めている作品「ふるさと」（前頁に記載）を市に寄贈した

私が比庵に最初にめぐりあったのは、篆刻の師が教室に持ってきて下さった大きな書の拓本でした。伸び伸びと自由に、更に碑の石材にも直書きするという大胆さ、驚きました。

それから二〇一〇年の鎌倉・源吉兆案美術館に始まり、横浜・墨の美術館、同光明寺、埼玉の遠山記念館と展覧会に足を運ぶ毎に作品にも比庵という人にも魅了され続けています。そして今回の作品展の何と見応えがあったこと。今でもひとつひとつが鮮明に心に残ります。

中央に並べられた赤富士・白富士は形も色もどこまでも気持ちよく、今良寛と盆踊りはほのぼのと、不動明王と老松は存在感大きく、頭から離れません。歌・比庵、画・玉堂の合作（二点）もお互いを先生と呼び合う間柄が非常に良い形で表されていると思いました。中央テーブルに置かれた本や写真を見たら、今もそこで書いて描いているのでは、の錯覚さえ起こしそうです。

お孫さんの清水固氏による来場者へのお話も、比庵と娘の明子さんを始めとする周りの方々への情愛に溢れ、画や書に表れる温かく豊かな心が脈々と受け継がれているように感じました。

「ほのぼのと」「毎日佳境」「あした夕べにたのしかるべし」添えられた歌や言葉は生き

方そのものだと感じました。
今回の展示作品の殆どが八十九代のもので、「くれなゐをもて老いを描くと」と詠んだ通りの意気込みが顕われ、比庵芸術の集大成を観せてもらった気がします。

書道研精会の白黒の「八十五比庵」の一冊より
みんなみのバナナと北の林檎とを一つに盛りて貧しくあらず
一つに盛りて貧しくあらず
を眺めています。改めて比庵という人の多くの魅力の要素を感じ、好きな一枚です。
唯々感謝の素晴らしい展覧会でした



バナナと林檎
上から 比庵 八十一
八十五
八十四

会費納入のお願い

28年度の会費を下記に納入されますようお願いいたします。

一口 1000円（複数口歓迎）
三井住友銀行鶴見支店普通 7061558
名義…クボタノブユキ

比庵佳境の会

会長 清水 固（清水比庵の孫）
〒247-0022 横浜市栄区庄戸 3-5-18
TEL&FAX 045-893-8932
URL: <http://www.hat.hi-ho-ne.jp/katashi-shimizu/>
事務局：村上 信行
〒247-0022 横浜市栄区庄戸 4-4-2